特集3

分科会報告（要旨）

〈第一分科会〉

寺檀問題と教化活動

第一分科会は「寺檀問題と教化活動」を主テーマとして「寺檀関係の見直しを」（北川即正）」「寺檀関係を再組織せよ（木名瀬寛明）」「寺檀関係と教化活動についての課題」（小倉光雄）」の各発題にもとづいて討議された。

討議テーマが、日頃教師の誰もが実際に寺院活動の中で直面している、非常に身近なものであったことから、参加者全員が会議に没入、活発な意見交換がなされて、終始盛り上りのある有意義なものになった。

第一日目は、まず個々の寺院活動の状況、抱えている問題点、これからの展望、について、参加者全員が順次に貴重な体験や意見発表を行ない、これらの意見をもとに次の五つの項目にまとめ、二日目はこの五つの問題について重点的に討議することを決めた。

一、教化の場としての寺院の活動
　(イ)追善供養のあり方と教化
　(ロ)密接な関わりの中の個人教化
二、寺院をはなれての教化活動
三、寺院開放の問題
四、教師の姿勢
五、寺族の姿勢

第二日目は、前日発表された意見により、明らかにされた教化活動の実態を踏まえて、統合した五つの項目をもとに、現在の教化のあり方について反省すべき点は謙虚に受けとめ、更に討議を深め、周知をあつめて明日への方策を見い出し、今後教化の現場での実践を誓い合って、二日間の討議を終えた。

概要は次の通りである。

(一) 教化の場としての寺院の活動

(イ) 追善供養のあり方と教化

現在の寺院の役割の主たるものは、大部分がまだまだ檀家が葬儀や、年間法要を営む際、本堂にて住職が読経回向をすることであり、住職はそれによって財施を得、それが寺族の生活の経済基盤になっている。

従って檀家数が多ければ、住職及び寺族の生活は安定するため、ややもすると、葬儀や年間の法事さえ勤めていれば、それでいいという考えに堕ち入りやすく、教師本来の使命である、伝道教化ということが、基だ疎かになっていることは否めないであろう。

故にただ単に亡き霊に対し、読経、回向すればいいというのではなく、(勿論真剣な気持での読経回向は大切)法要、仏事の営まれる時を布教の場として捉え、法要後の法話や、対機説法を行ない、積極的に人々に説法教化していかなければならない。説き方については次のような事があげられる。

○亡き霊や先祖に対しての供養の意味や、大切さ。

○供養を志すものは、まず「懺悔滅罪」ということを考えなければならない。日々の行動が、先祖の意志に反するかどうか。法華経の教えに照してどうか。深く反省し正しい道を歩まねばならない。

○日蓮聖人は身命を賭して我が国に法華経を弘められた。法華経の教えと日本とのつながり、その日本に生れ、尊い教えに値うことができた者は、皆んな仏子である。日蓮聖人の弟子檀越である。この自覚にたち、寂光浄土を娑婆世界に建設していくことが使命である。

○先祖に対する報恩、日蓮聖人、久遠本仏への報恩

○生かされている自分、全てのものに感謝し、人を愛し、県を愛し、国を愛する事が大切。

○因果の教え(善因善果、悪因悪果)

また、亡き霊に対して、個々別々に生前の人柄、特徴、在りし日の出来ごとを、法話の中に折り込み、故人にふさわしい話をする等教師はもっと〳〵日常の努力と、工夫をしなければならない。

(ロ) 密接な関わりの中の教化

檀家、信徒とのコミュニケーションを大切にしなければならない。檀信徒がお寺に来た時は出来るだけ対話の時間をつくり、家族の一人一人の中に融け込んで、密接な繋りをもち、いろいろな生活上の苦悩を聞いて相談相手になってあげることや、信仰の道を説いて解答を与え、導くことが重要である。檀信徒の方から進んで相談に来るような、存在価値のある寺院にならし

なければならない。

とくに檀家の少ない、年回、法事の読経や回向だけに追われる事のない寺院においては、この布教の仕方は不可欠のものであり、現に種々の相談がよせられ、適切な解答により困難を乗り越え、救われて喜んでいる人々がいるが、こうして改宗者を得、未信徒に導入していくことが大切な仕事になっている。

その他具体的な事例として、結婚の相談に乗って、相手を探してあげる。めでたくゴールインすると、仲人をつとめる。本堂にて仏式の結婚式をあげることもある。平和な家庭が築かれると、自然に感謝されるようになり、それが信仰の道を開くきっかけになる。やがて子供達が生れると今度は名付親になる。子供達の発育円満、学業成績の折願を頼まれるようになり、祈念簿を作成し、本堂で祈願をしてあげる。

年間の行事（春秋の彼岸、盂蘭盆御施餓鬼、御会式）の案内状を必ず檀信徒宛に出し、いつも決り文句で、ただ何々を致しますから御参拝下さい、というのではなく種々の法話を盛りこんで、趣旨がよく理解できるようにする。

過去帳をみて檀家の年間の命日には、前もって手紙を出し、お寺でも回向をするが、当日はお参りし、追善供養の誠をつくすようにすすめる。あるいは祥月命日には必ず電話をする。

毎月の葉書伝道、掲示伝道、寺報や布教誌を発行し、質問欄を設け解答を載せる。その効果については、住職と檀信徒が緊密なつながりをもち、人間同志、心が通い合うと、檀信徒も住職を信頼し、寺院活動についての理解が深まり、よき協力者になって行事の際や、何かある時は、お寺へ来て一生懸命仕事をするようになる。

信仰心も増し時には住職の替りに他の檀信徒に法の道を説いて聞かせたり、布教の手助けもするようになる。

だから檀信徒の中にこのような核となって他の人々を引っ張って行く人が生れてくることは大きな意義があり、教師はこの核となる檀信徒を育成していく事が極めて重要である。

㈡　寺院をはなれての教化

住職、教師は寺院のみで布教すれば良いというのではなく、寺院より出張し、外のいろいろな場所での種々の活動にも力を入れなければならない。

具体例としては、毎月檀信徒の家に、命日の回向にまわる寺院が多くあるが、経本をいつも持参して相手

の家の人達に読ませる。訓読で読んで解説する。その折、生活上の悩みごとの相談があれば聞いてあげる。

老人クラブや婦人会の会合に依頼されて人々のためになる話をする。

民生委員や保護司、警察少年教助員等の役職を引き受け、困っている人達を救い、非行少年の更生にあたる。PTAの役員をして、若い母親たちと接し、悩みを聞いてあげるようにする。(実際困った時に相談されている事例あり。)ボランティア活動をする。等があげられ、時代が進んでいるのでマスメディアを通じての布教をもっと考えるべきである。

この問題については参加者の中に丁度テレビを通じ、実際に出演して、相談される事柄に対し、とくに心霊的な面から解答を与え、広く視聴者に宗教による救いを説いている教師がいたので、今までの体験と考え方が述べられた。

それによると、明確に解答ができないとテレビ出演は局の方から依頼に来ないし、また続けて出演することはむずかしい、マスコミはとにかくアピールする巨大な力があるので大勢の人達に一度に教えることができるという大きなメリットがある。現にテレビ出演しているために自坊へ全国各地の視聴者から、悩みを訴えてくる人があり、きわめて反響が大きいことに、驚いてしまう。テレビの時も同じであるが、たずねてくる人に対しては、即応説法で当り、相談事に応じて適切に、しかも明確に「このようにすべきだ」と解答している。そうすると、相手に心から信頼し、真剣に比方の言う通りに物事に対処し、困難を乗り越えていく。

また、「意外性の説法」といって、どこが悪いのか、どうすれば良いか、わからず、途方にくれている場合などに「これが原因だ」と言って時には意外に思われるこうな事でも、ズバリと言って救う時もある。

総じていえることは人生を左右するような事柄、一家の浮沈にかかわる事柄等、大きな問題から小さな事まで民衆の悩みはさまざまであるが、教師も研讃をつみ、説教の妙ともいうべきものを身につけて如何なる事に対しても的を得た答えが出来るようにならなければならない。

宗門においても研究機関を設け、画一的な法話例の発行だけでなく、あらゆる民衆の相談事や、悩みに対して適切な答え方を網羅した「救いの説法集大成」というものを作成すべきだという提言をする、とのことであった。

その他には、農村の減反問題にふれて、国の農業政策に対して農民は不満をもっている。農民にこの問題について相談された時、どのように対処したら良いか、という提起がされ、農業指導者、農政にたずさわっている人を呼び、転作の問題を考えてあげる。住職自身も、土壌についてどの作物を栽培したらいいか調査し、この農家の規模、技術、才能、経験、等の観点から、総合して判断し、この作物を栽培しなさいと具体的な方策を示して答えてあげるのが良い。

(二) 寺院開放の問題

広く地域社会の人々のために寺院を解放し、役立てることが必要であるという事が話し合われた。

寺院を開放し、いろ〳〵な催しごとを行ない、種々の教室を開き、縁を結んだ人々に折にふれて教えを説き、手を合すことを覚えさせ、除々に教化していく。このような面からも未信徒の信徒化を計ることができる。

しかし、寺院開放といっても全く規制なしに正否を問わず開放せよというのではない。

開放は本仏、宗祖の教え、いわゆる正法に照し、間違っているものではないという判断にたって考えるべきである。

例えば社会に害を与えると思われるものや、宗教を否定する集団があった場合には、やはり拒否すべきであり、あくまで教化に結びつく可能性のあるものに対しての開放が望ましい。

また、本堂の場合は敬虔な信仰の祈りを棒げる道場であり、仏道修行の場としての開放以外に無暗に使用させるのは好ましくない。

寺院に入ってからの行動に対しては規制すべき事柄はもちろん守らせるべきであり、規則を定めて掲示することが良い。

具体例としては、月に一回、あるいは週一回の信行会（もち方は種種様々）はいうまでもなく、夏休みに子供達をあつめ修養道場を開設すること。その他、次代を荷担う若い人達の教化が重要なことであり、その為に剣道や、柔道の道場を開くことや、書道、学習塾音楽教室、図書館等を開設することがあげられ、効果について、子供が本堂の前で手を合すようになり、親がこれに習うようになった。無縁の墓に子供が食べるものを供えたら、見ていた親がめざめて供養を志した、という実際にあったことが紹介された。

その他は何日間か泊り込みで企業の社員研修を依頼され、修養させることもいいという意見もあった。

(四) 教師の姿勢

「お金さえ納めれば良い戒名をあげるよ。」他所の檀家であっても、いとも簡単にいう住職。菩提寺が遠方で読経を依頼され、菩提寺が全く知らぬ間に葬儀を勤め、戒名をつけてしまう住職がいる。

先にも述べたように住職、教師は自らの生活の糧を得るため、安楽な生活を営む目的の為の手段として寺院活動を行なっていると見られる傾向があり、教師のモラル、教師の姿勢がきびしく問われる。

そして、この戒名の問題がとりあげられ、戒名などに頼着しないという人達もいるが、その多くは亡き人に対して心から供養しようという気持はないし、実生活も信仰に裏づけられた望ましい家庭ではない。

反対に良い戒名をもらいたいと願うのは、亡き人に対する感謝、成仏を祈る肉親の心のあらわれであり、尊いことである。

ただ「世間態が悪いから」「生前中大きな事業を営んでいたから」「公的な役職をしていたので」等の理由から、ほとんど信仰心はなく、お寺に参詣した事もあまりないのに、お金さえ出せばもらえるだろうという安易な考えでいる人があり、戒名はお金で買うものという解釈をさせていることは、住職も深く反省し、是正しなければならない。

本来は戒名を授けるということは、授けられる側からは受戒という意味で、仏の戒名を守っていく誓いをして授けられるものである。

故に逆修といわれる生前に授与し、本人に仏道修行に励みなさいという事は大いに勧めるべきである。

亡くなった時に授ける場合、とりわけ良い戒名の場合は、まず遺族が心からの供養を続ける。自分達も仏道修行に励み、正しい生活を送って善根功徳を積むことが勤めである、とはっきり説いて聞かせる。

尽きるところ戒名授与の正しい意味をよく理解させるのが肝心であり、ほしければいくら納めなさいということは一切止めるべきである。

更に教師の姿勢について、まず自らが規律を重んじ、勤行をはじめとする日々の行に励み、求道者としてたゆまぬ研讃を積むと同時に人々を教え導いていく化他行こそが、私達の使命であり、仕事なのだと心底から考え、熱意に燃え、襟を正して真剣に伝道教化に取りくむことが何より大切である。

こういう姿勢こそ、尊敬すべき出家者の生活態度として、檀信徒に感銘を与え、共感を覚えさせるのだ。

極言するならば私達の行住坐臥、一挙手一投足が常

に無言の教化になることを忘れてはならない。

その他檀家の「実績表」を作成し、年間のお寺の行事に参加したかどうか。財施の額はいくらか、特に功労があったかどうか、全部記入して実績を見る。

そして参詣しなかった人は次に来た時に、この表を見せて、折角お寺で皆の為になるよう、仏祖の教えにもとずき、供養の機会や、報恩の誠を奉げる集い、修養の集い等いろ〳〵な行事を行なっているにもかかわらず、参詣しないというのは檀信徒のつとめを果していないことになる、出来る限りこれからはお参りしなさい、と話して聞かせる。この実績表は戒名をつける場合でも一つの基準になる。

ただ誤解のないように、これは決して財施の額にこだわるものではなく、檀家の信仰を高め、安心を得させる目的のものである、という事例が紹介され、結論的に財施の問題について「道心衣食あり」。教師が姿勢を正して、教化の場にのぞむなら、欲せずとも衣食は足る。必ずや寺門繁栄は約束されるであろう。

檀信徒の「人間作り」を心がける事が大切だ。人間作りが成れば寺作りは出来る。

(ハ) 寺族の姿勢

寺族の姿勢についても考えなければならない。

まず寺庭婦人について、寺庭婦人は、一番住職の助けにならなければならない立場にある。

檀信徒に接する機会が極めて多く、いろいろな悩みごとを打ちあけられる事も多い。これに対してはよく話を聞いてあげ、同情し、励まし、信仰の上からは、このようにすべきではないか、というアドバイスは与えられるようにならなければならない。一教化者であるという自覚を持つ事が大切である。

身延山も池上本門寺もお参りしたことはない、日蓮聖人の御一生も、四大法難もわからない、というのではこれからは通用しない。

故に地域の寺庭婦人会、身延山の寺庭婦人の集い等を通じ、積極的に研修を重ねていく事が必要である。

次に後継者育成の問題について（世襲ということを前提としての話し合い）子供にはあまり小さい中に強制することはよくないが、日々の勤行になるべく参加させ、檀家の回向まわりに連れて行くなどして、実際に身体で勤めを覚えさせていく事が良いだろう。

折にふれて、出家者の自覚、社会の中で大きな役割を担っていることなどを説いて聞かせ、成人してからは、寺院の仕事の中のいくつか責任を持たせて、させる事が良い。

住職や、寺庭婦人はまちがっても、寺の生活についての愚痴や、不足を聞かせてはならない。

しかしかたよったエリート意識を持たせ、若いのに檀信徒に対し、威張るような態度を植えつけないように気を付ける。

修養道場や、沙弥校には進んで参加させよ。

寺族全般については、住職が檀信徒と共に行なっていればいいというのでなく例月信行会や、唱題行、寒修行等に積極的に参加し、信行に励まなければならない。

日課を定めて規律ある生活をする。

また、住職夫婦、と後継の息子夫婦（原因は姑と嫁の確執）との折り合い悪く、遂に若夫婦はお寺を出て他所に行き、息子は在俗の身に戻ってしまった、という実例が話され、これでは住職は檀信徒に対して説法することはできない。

住職を中心に、その指導のもと寺族は常に仏の知恵をもって、和合をはかり、信仰家庭のモデルともいうべき、平和な家庭を築かなければならない。

要は寺族も、檀信徒と同じ求道者なのだから、心を一つにして共に修行しましょう。浄土の顕現を目指しましょう、という姿勢を常にもち続ける事が大切である。

その他宗務当局に対して次の要望事項があった。

一、創価学会に入会し夢中になってしまった檀家で埋葬することになり、読経も回向も要らない。本堂にもお参りしない。自分達だけで埋葬していきたい。という申し入れがあり、当然ながら法要儀式を行なうことを拒否するなら埋葬は許可しない。と住職は答えたが、その後次第に問題が大きくなり、非常に苦労したことがある。

他にも自分と同じような経験をした人がいると思われるが、宗務院ではこの埋葬の問題について、どうすればいいか、適切な指導体制ができていないし、方策が確立されていない。

今までの判例等にもとずいて研究調査の上宗務当局として、明確な指導書を作り配布するなどして統一見解を示すべきである。

二、日蓮宗新聞の購読運動が推進されているが、これに対し、一〇〇％購読すべきだという意見が出されたが、反面、今のような新聞では檀信徒に、なかなか購読させるのはむずかしい。

なぜなら檀信徒に直接関係ないことでかなり紙面が埋められているし、檀信徒が読んで理解

するにはむずかしいと思われる。また、一言でいえば面白味がない。もっと檀信徒の実生活に直結し人生の指針を与えていくような紙面にしてほしい。全国各地の住職の中で同じように考えている人も多勢いるのではないか。これなら檀信徒に読ませよう、と誰もが思うような新聞になれば、必ず購読者は増えるはずだ。

三、最後にこの中央教研会議、第一分科会の「寺檀問題と教化活動」において、発表された貴重な事例体験、熱心な討議の中から、見い出された今後の具体的な方策、これらをもとにし、更に全国各地の第一線で布教伝道に打ち込んでいる教師達の意見など集約し、布教伝道の指導書、「檀信徒教化の手引」を作成する事が、全国の教師の為に今一番必要なことであると思われる。

この会議の参加者は出来るだけの協力をするので、宗務当局で是非とも指導書の発行を実現してもらいたい、との事が満場一致の賛成で決り、以上で二日間の会議を終了した。

〈新井貫厚〉